



# 不可能が請求書を突きつけた

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO

## まえがき

子どもの頃、父が日曜の昼食に私たちを連れ出してくれたことを覚えている。いつも同じ店だった。サラ・ベッラ。女主人は大柄な人で、いつも笑っていて、いつも迎え入れてくれた。料理はうまかった。絶品だった。ほかにはない味だった。

父の上司が同席することも多かった。フリウリの生まれで、背は二メートル近く、体重は百二十キロをゆうに超え、健やかな食欲に恵まれていた。彼は家族を乗せ、メッシーナから車で下りてきた。

食事の終わりに勘定書が来る。父は支払うために椅子から立ち上がったことが一度もなかった。ただ紙幣を折ってナプキンに挟み、空いた皿の上に置いておくだけだった。

二人が割り勘にするのを見たことがない。別の取り決めを見たこともない。その話でやり取りが交わされるのを聞いたこともない。

彼は上司だった。父は営業だった。

そして払うのは営業だ。

ある晩、車をガレージに入れているとき、父が私に言った。

「お前はいつも私が払うのを見ている。いつも私が先に金に手を伸ばすのを見ている。だから勘定を払っているのは私だと思っている。私ではない」

私には分からなかった。

分かるまでに一か月かかった。

ある日曜、同じテーブルで、上司が内ポケットから手帳を取り出し、父が話す横で書き始めた。

誰が新しい店を開いたか。誰が畳んだか。誰が支払いを滞らせているか。誰の息子が家業を継いだか。誰がまだ競合の商品をショーウィンドウに並べているか。

誰も私に注意を払わなかった。私は子どもで、食卓で子どもは数に入らないからだ。

月曜の朝、その記録は上司の署名でミラノへ送られていった。

父は夕食代を払った。上司はそれ以外のすべてを払った。

二十年間、警告は一度もなかった。懲戒の記録も一行もなかった。そして何より、昇給を拒まれたことが一度もなかった。

父はジレット・イタリアで、社長と営業部長のすぐ次に給与の高い三人のうちの一人と見なされてよかった。誰よりも多く売ったからではない。毎日、顧客の前で繰り広げられる物語という付加価値を、ほかの誰も持っていなかったからだ。

勘定はいつも、その席に着いていない誰かが払っている。

この一文を覚えておいてほしい。最後に必要になる。

## 第一部

なぜこんなに長い前置きを置いたのか。

今日起きたことを説明するためだ。そして、いつか本当に起きてほしいと願いながら私が書いたことを説明するためだ。近い将来なのか、ずっと先なのかは分からない。

八月半ばの日曜の午後だった。焼けつくような暑さ。乾いた空気。湿気がほとんどないからこそ、かえって熱く感じるあの種の気温だ。

エアコンは全力で回っていて、妻はいつものように切るよう言った。電気代は塩を足さなくても十分に辛いのだから。

午後六時半ごろだった。赤い肘掛け椅子に身を伸ばしていたとき、携帯が鳴った。

国番号は +1。アメリカ合衆国。この時間に、向こうはまだ昼どきのはずなのに、いったい誰がアメリカから私にかけてくるのか。

私は出た。

「もしもし」

「もしもし」

落ち着いた声だった。低く、わずかに喉にかかる響き。

「フェルディナンドさんとお話したいのですが」

「私です。どちら様でしょうか」

「ロバートです。こんばんは。フランス姓のアメリカ人です」

私は笑った。

「お電話ありがとうございます。ただ正直に言えば、この悪ふざけを仕組んだ方は大したものですよ。まんまと引っかかりました。もっとも、考えてみれば、ローマにしながらアメリカの番号からかけておられる？」

「はい。これは私の個人の携帯です。公式の経路は使っていません。これは機関としての通信ではありませんから。まだ私に許されている数少ない特権の一つです。疑わしければヴァチカンの交換台をお教えしますので、確かめてくださって構いません」

「いえ。結構です。どうぞ続けてください」

私は懐疑的だった。疑っていた。慎重だった。それでも切りたくはなかった。無礼は一度も私の性分だったことがない。代わりに内なる警戒装置を最大に上げ、自分が正確にどこへ着地したのかを見極めようとした。

「お聞かせください、教皇聖下。本日は何をいたしましょうか」

「名前で呼び合いましょう、ナンド。年齢はそれほど離れていません」

「そのとおりです。離れているのは役割だけです。あなたはカトリック教会のナンバーツー。私は最後の書記です」

「なぜナンバーツーなのですか。私はナンバーワンのつもりでしたが」

「不快に響いたならお許しください。ナンバーワンはすべてを築いた人、イエスです。ジレット時代の私の同僚です。自分が何をしているか正確に分かっていた唯一の方です。最高経営者を公に任命できなかったのも、教皇という称号を考え出し、それを自分の流儀で満たす自由をあなたに与えたのです」

彼は声を上げて笑った。

「これで分かりました」と彼は言った。「なぜ私の家の廊下という廊下で同じ問いが響くのか。今日はもうジレットナラティブを見たか、あの同僚が今度は何を書いたか、と」

彼の速度に合わせるのに苦労はしなかった。よい営業は、始まった瞬間にそれが遊びだと分かる。だが彼もまた、それが分かるだけの知性があり、すぐに合わせてきた。

「私がアメリカの銀行口座に紐づいた番号からかけているのをご存じですか。少し前にその銀行へ直接電話したら、いたずらだと思われて切られました」

「はい、聖下」

「いいえ、ナンド。どうかロバートと呼んでください。せめて私的な場では。儀礼抜きで。そのほうが生きやすい」

「では、ロバート。銀行の選択を誤りましたね。あなたの立場なら、先方が出向くべきです。それどころか、ヴァチカン市国内に支店を開くことは、ほぼ義務と見なされてよいはずです。威信だけでも十分に正当化されます。まともな銀行家なら議論することさえ恐ろしい機会です」

「おっしゃるとおりです。ただ経済は私の分野ではありません。そしてこの電話は探りです。あなたが私に送ってくださった手紙と同じように。結局のところ、私たちは同じ仕事をしています」

「それは何でしょう」

「私たちはどちらも、隣人を理解しようとしているのです」

## 第二部

「ナンド、あなたがご自分のジレットヴァチカンについて書かれた話は、すべて読みました。最初の質問はこれです」

なぜ二十二の言語なのですか。二十二の世界？ 教会が実質的に周縁でしかない場所にまで。インドをご覧ください。

「あなた方が一度も本気で使ってこなかった市場の規則があるからです。

消費者は顧客ではありません。顧客とはすでにあなたから買っている人です。消費者とはまだ買いうる人です。

あなた方は顧客を数えます。洗礼を受けた者。実践する信徒。登録された信者。そしてそれ以外のすべてを忘れます。

市場はすでに強い場所では勝てません。市場は、自分が不在で、誰も自分の到着を予期していない場所で勝つものです。

二十二の言語は二十二の翻訳ではありません。二十二の開かれた扉です」

「少しお待ちを。信仰は商品であり、人は歯磨き粉の銘柄を替えるように宗教を替える、とおっしゃるのですか」

「人は動く、と申し上げているのです。その言い方がお気に障るなら、この三十年でラテンアメリカ全域のあなた方の教区に何が起きたかをご覧ください、誰が彼らを動かしたのか教えてください。

つまり私は、数字を一つでも申し上げる前に、真面目な精査を行う権利を留保します。検証していない利回りは約束しません。それはコンサルタントのやることです。そしてコンサルタントはどのみち請求書を送ります。

いま申し上げられるのはこれです。あなた方のマーケティングは——ええ、あなた方はマーケティングをしていますし、下手にしています——二十年前に時代遅れになりました。もはやキャンペーンで信奉者を集める者はいません。どの業界にも。

効くのは一つだけです。人がそれをしようと決める前に、すでに行っているその仕草そのものになること。

ですから残る問いは一つだけです。そしてそれはあなたへの問いです」

「どうぞ」

「歴史のなかの教皇として記憶されたいのですか。それとも歴史をつくった教皇として記憶されたいのですか」

「似て聞こえますね」

「まるで別の世界です。そして答えはひとえにあなた次第です」

## エピローグ

「さて」と彼は言った。「お時間を、ご対応を、そして何よりご関心をありがとうございます。

一つ申し上げねばなりません。私はあなたに、単なる語り手として話しかけていたのではありません。社会学者でも、作家でも、経済学者でもなく。私はあなたに、システムの戦略家として話しかけていました。

決断を下し、私の考えを正式にお伝えする権利を留保します」

それから彼は間を置いた。

「一つお尋ねしたいことがあります、ナンド。この全部です。二十二の言語。精査。剃刀の箱に挟む一枚。誰がその費用を払うのですか」

そして私は不意に、一九七五年のガレージに戻っていた。実は自分が払っていない夕食代を、たったいま払った男の傍らに。

「ロバート。払うのはいつも人々です。いつも同じ人々です。あなた方はそれを献金と呼びます。私たちはそれを小売価格と呼びました。しかし開かれる手は同じ手です。

違いは決して、誰が払うかではありません。違いは、その金のどれだけが役に立つ何かの形で戻り、どれだけが滞ったまま、少なく生み出す者に多く支払うために使われるか、です。

父は夕食代を払い、そして何も払っていませんでした。手放したものが、使ったものより価値があったからです。

いまや、自分がテーブルのどちら側に座っているかを決めるのはあなたです」

「私に何か尋ねたいことはありますか」と彼は言った。

「はい。ご自愛ください。ご自分がどこにいるかによく気をつけてください。世界でいちばん美しい場所です。いちばん安全な場所ではありません。危険は内側から来ます。そしてそれは、まだ理解していないものを解体しようとするときにこそ見えなくなります。

もう一つ、聖下。ありがとうございます」

イエス・キリストに讃美あれ。

私たちは本を売りません。関係を築きます。

*Ferdinando*